

# 幼稚園のクラスの人数について



Childhood Education,  
Association for  
Education International  
Sept. 1966より

米国の幼年教育誌 Childhood Education の一九六六年九月号は、「教師―生徒の比率と学習」と題して特集をしている。ここでは、そこに記されたいくつかの報告の内容を紹介する。

## 米国の幼稚園・学校における教師と生徒の比率

まず、A・Vケライアーは、「効果的学習と教師―生徒の比率」と題して、米国教育協会（NEA）およびその他いくつかの調査報告をまとめている。一九六五年のNEAの調査によると、

一、六六〇、六〇六人の幼稚園児の中、六八・五パーセントは、二五人以上のクラスに入っており、三二・一パーセントは、三〇人以上のクラス、七・四パーセントは三五人以上のクラスに入っている。しかも、四一の幼稚園は、一クラス五〇人以上である。すなわち、二五人以下という理想的な小人数のクラスで教育され

ている幼児は、全幼稚園児の三一・五パーセントにすぎない。これを小学校児童と比較してみると、米国の小学校全児童の八三・九パーセントが、二五人以上のクラスに編成されており、四八・三パーセントは三〇人以上、一三・一パーセントは三五人以上、二・五パーセントは四〇人以上である。すなわち、小学校は、幼稚園よりも一学級あたりの生徒数は多いけれども、半数は三〇人以下の編成であり、四〇人をこえるところはごくわずかである。

米国の幼稚園のクラスの大きさを語るとき、米国においては通常、一人の教師が午前のクラスと午後のクラスと二クラスを担当している事実を見なければならない。故に一人の教師についてはみると、午前三〇人、午後三〇人のクラスを担当することは稀でない。この論文においても、この事実を眼をむけ、これを高等学校

の場合と比較して論じている。すなわち、一九六五年の全米高等学校のクラスの大きさの平均は二九人である。年齢が小さいほど個人的配慮を必要とするのに、これでは幼児はあまりにも尊重されていらないかと強く論じている。

アイゼンバークら（一九六六）の実験教育の結果によると、幼児数を一クラス一五人にしたとき、IQは八ないし一〇上昇した。その原因としては、教師が「温く、活動に変化があり、柔軟性があること」が重要であると指摘している。その他の研究でも、明らかに、「温かき、活動の変化、柔軟性」は重要な要素であるとしている。

G・M・キャノンの研究（一九五五）によれば、幼稚園のクラスの大きさが大きくなると、攻撃的な行動が多くなり、教師との個人的接触が減少する。小さなクラスでは、グループ生活はより友好的であり、活動が多様であり、創造的である。

ヘレン・ヘファナンは、クラスの大きさについて次のように述べている。「三五人ないし四五人の大きなクラスでは、明らかに子どもたちは個人として扱われない。このような巨大なグループでは、その結果としてあらわれるものは子どもの従順さである。そして教師は子どもの要求を認知することができず、個人指導は不可能となり、個人について知ることができなくなり、問題解決

を助けるようなことができなくなってしまう。

それでは、教師―生徒の比率はどのくらいが望ましいか。

この調査報告の結論では、小学校で二五人が望ましい最大限の人数である。環境的に劣悪な地域で、五人の子どもにも一人の教師がついて一五人一グループとすれば、すばらしい教育効果をあげることができる。

現代の進歩した社会で、これだけのことをすればすばらしい教育ができることがわかっていながら、どうしてこれくらいのことのできないのだろうかとの調査報告は結んでいる。

多人数のクラスと少人数のクラスとではどのような相違があるか

第二の報告は、英国のロンドン大学のG・M・キャノンによる「幼稚園のクラスの大きさの一研究」である。

「小さな部屋、机と椅子がぎっしりつまっていて、机の間を歩くこともできない。四〇人以上の幼児が一部屋の中にぎっしりつまっている。五、六才の子どもが一日の大部分を机の前に坐って、静粛な、形式的な仕事をしている。教師は当惑し、重労働で、このような課業は適当でないと感じながら、こんな大きなグループをどう扱ったらよいか他によい方法もみつからない」これは一九六六年のイギリスのロンドンのある情景である。しかし、これは

今日の世界のいたるところでみられる情景であろう！

あまりにも多くの子どもが、あまりにも少ない教師のもとに、あまりにも小さな教室の中にいることは、現代のあらゆる場所で、教育の重要な問題となっている。あまりにも混雑したクラスは、あらゆる年齢の子どもにも重要な問題であるが、ことに集団経験を始めたばかりの幼児には致命的な問題である。それは将来の学習にわるい感情や態度を育ててしまう。

この研究では実験的に大集団のクラスと小集団のクラスを比較している。大集団の平均幼児数は三八・五人、小集団クラスの平均幼児数は二四・七五人であり、いずれも同一の教師が、同一の部屋と設備の中で、同一のプログラムのもとの指導である。その結果は次のとおりである。

1. 攻撃性について 大集団において、より攻撃的な行動がみられた。これは、その教室にあるものを使うのいうんと待たされたり、やりたいことも代りばんこにしなければならぬことに起因する欲求不満というところで説明される。

2. 友人との結びつき 小集団の子どもたちは、よりたやすく友人をつくり、その人数は大たい五人であり、許容的な雰囲気では友人に応ずる。また小集団の子どもは、所属意識をもち、より快く集団生活に適応し、お互いに対して寛容であり、協力的である。

る。したがって大集団にみられるような、「一人の友人に依存する」行動はほとんどみられない。

3. 教師との接触 小集団において、幼児と教師との接触はより緊密である。ここでは、教師は、子どもの生活において「一人のより重要な人物」となっている。また小集団においては、教師はそれぞれの子どもがもつユニークな人格を認知して、教師自身も創造的にふるまうことができる。

4. 子どもの活動 つみきとままごについて両者に明白な相違が観察された。小集団の子どもが遊びに変化があり、創造的であったのに対し、大集団の子どもはほとんど机の前で座って絵をかいていた。それは、それ以外の材料や設備を用いる機会がないためでもあるし、また、クレヨンが家庭でも使用するのになれている材料だから、安心感をもって使うことのできるものだからである。

5. 教師の感情 大集団は、むずかしく、うるさく、秩序がないと記録され、小集団は情愛がふかく、くつろいでいて、生産的であると記録された。大集団では、それぞれの子どもが自分のいうことを先生にきいてもらうために、また自分の要求をうけいれてもらうためにだんだん声を大きくしてしゃべらなくてはならぬから、うるさく攻撃的になる。そして、一日の終りになると、

子どもも教師もへとへとに疲れてしまうのである。それに対して、小集団では、教師も子どもも、自主的、創造的であり、幸福感をもっていた。そして教師は小さなグループの中で活動するとき、満足感と、たのしさと、成就感を味わうことができた。

第三の報告は、カリフォルニア小学校長会のクラスの大きさに関する委員会の一九五九年の報告の引用で、クラスの大きさに関する研究の最近の動向を概観紹介してある。それによると、該当する研究は二六七もあるが、方法的に不十分なものも多く、その中から最も信頼のおける研究二二をとり出した。その中、七十二パーセントの一六研究が、小規模の学級を好ましいとし、三研究が大規模の学級を好ましいとしている。そして残りの三研究がいずれとも結論を出していない。

#### 子どもの理解とクラスの人数

第四の報告は、R・E・ピルの「理解することは重要か」と題して、子どもの個人を理解することは教育の上で重要だといわれているが、それは教師の担任する子どもの数と関連があることを論じている。やや基本的な問題の側面を扱っているが、次にその概略を紹介する。

人間理解に重要な概念の一つに、「経験に対する開放性」(Openness to experience)ということがあるが人が自分自身や周

囲の世界を見るとときに、それが自分の経験をそのままに認知したものであるとき、その人は経験に対して「開かれて」いるという。「開かれた」人は、経験が増すにつれて、たえず変化し成長する。それに対して、「閉ざされた」人は、そのままを見ることのできないで、認識が変化することに抵抗を示す。その人は、防衛的であり、拒否的である。

教師はこの「経験に対する開放性」について、いろいろである。たとえば「開かれていない」教師は、自分がいちばん困っている問題は、「学習意欲をもたず、学習能力をもっていない少年少女を教えることだ」という。もっと「開かれた」教師は、自分の当面している問題は、「いかにして教師として自分自身が向上しつづけるか」ということだと述べている。「開かれた」教師は、積極的、肯定的な態度を示すことができる。

ところで、いくつかの研究の示すところによると、教師がより「開かれて」いると、子どもはその教師を、自分の成長に役立つ関係を与えてくれる存在としてみている。また、教室の決定は、教師と子どもの両者によってなされる。より「開かれていない」教師のクラスでは、決定は、教師か子どもかいずれか一方のみによってなされる。そして、「開かれた」教師によって教えられた子どもは、自分自身に対しても、他の子どもに対しても、より積

極的、肯定的である。学業に対してもより積極的である。教師が子どもを理解するときに、それは明らかに、子どもの学習に影響をもっていることができる。

そして、教師が子どもを理解できる程度「開放性」は、その受けもつ子どもの人数と関係がある。人数の負担が大きくなるほど、教師はより防衛的となり、より「閉ざされ」る。すなわち、クラスの人数は、教師にとっても、子どもの成長、学習にとっても重大な問題である。

#### クラスの適正人数をきめる要因としての依存性

第五の報告は、D・H・コーエンによる「依存性とクラスの大さき」と題する論説である。ここでは、クラスの人数をきめる要因は何かという問いからはじまる。管理上の便宜とか、財政上の問題とか、これをきめる決定要因ではなく、まして、いいかげんにきめるのであってはならない。もう、しっかりした根拠にもとづいてクラスの人数をきめるべき時代である。大学の講義では二百人の学生がマイクrohonで講義をきき、そのあとで討論の間をもつ。その学習様式はまったく言語によるものである。あるナースリースクールのクラスは一五人であり、先生と子どもとの間では会話が交され、動きがある。その学習の様式は、感覚的、具体的、直接的である。大学生の場合には学習の責任は学生自身

にあり、ナースリースクールの場合には、子どもはおとなの与える機会に依存している。

この子どもとおとなの依存関係には三種類ある。第一は、情緒的——社会的依存性である。それは、おとなからの愛情を求め、承認、支持、注目を求める要求であり、教師は信頼し、頼ることのできる存在であることを求められている。よき教師はこの要求にこたえることのできる教師である。この依存の要求は、乳幼児期にもっとも強く、成長とともに次第に減少していくが、おとなになってもなお存在するものである。クラスの大きさはこの要求をみたしうる大きさである必要がある。

第二は認識的——知的依存性である。これは教師がより多くのことを知っているが故に生ずる教師—生徒間の依存性である。学習者の年齢が小さく、未経験なほどおとなの知識に依存し、年齢がすすむにつれて自分で解決できる領域はひろがっていく。もしも教師があまりにも多くの生徒を担当すると、この依存性は年齢とともに減少しないで増加していくであろう。

第三は具体的感覚的なものに対する依存性である。年齢がすすむにつれて、具体的なものにたよらないで言語による学習が可能になる。いったい、子どもの発達どの段階で、子どもは坐ってきいて、言語によって学習していくことができるのであろうか。

どのくらい具体的物理的経験が必要となるであろうか。その程度によって、教師が一人の子どもに必要とするエネルギーの量がきまってきたて、クラスの人数がきまってくるであろう。

ここに述べたような教師と子どもとの間の三つの依存関係によって、クラスの大きさはきまってくるであろう。年齢が小さいほど、一人の教師の担当できる子どもの人数は少なくなることは明らかである。

#### 教師の創造性とクラスの大きさ

教室における教師の創造性は、子どもの学習をすすめ、学習効果をあげるのに重要な要因である。R・W・オットは、ある市の四〇〇人の小学校の教師を対象とした調査を行ない、教師の創造性と関係のある要因を研究した。その中で、クラスの大きさは重要な要因であった。次にその要因について挙げておく。

- ・ すぐれた教師を観察する機会が与えられると授業はより創造的になる。
- ・ 校長が教師たちを励まして、個々の教師の可能性をひき出させるのにたくみであると、より創造的になる。
- ・ 柔軟性のある日案であると、教室はより創造的となる。
- ・ 授業の計画が注意深くなされると、授業はより創造的となる。

・ 教職員相互の間に、気持ちの交流と信頼があると教師は創造的になる。

・ 校長が創意と創造性に対して健全な態度をもっていて、教師がいろいろの教え方をためてみるができるようであると、授業はより創造的となる。

・ きまったやり方とは違ったやり方が奨励されていると、教師はより創造的となる。

・ 教師が従うべき規準が固定しており、毎日のスケジュールが固定している、創造性は減少する。

・ 教科書を全部すまさねばならないという気持ちから解放されると、授業はより創造的となる。

以上のような要因がみたされるためにも、クラスの人数が少ないことは重要な条件であることを、この調査は結論している。

ここに、クラスの人数をめぐっての米国におけるいろいろの研究や論説を紹介したのであるが、クラスの人数が少ないということが教育効果をあげるのにも重要な条件であることは、ひとしく一致している点であった。ことに幼児期においては、クラスの人数が適正であることが、教育の基本条件であることは明らかであるところであろう。